

論文審査の要旨及び審査委員

(2, 0 0 0 字程度)

報告番号	甲 第 27 号		氏 名	郭 瑞		
論文審査 審査委員	氏 名		職 名	氏 名		職 名
	主 査	関 崇夫	教授	委 員	西澤 泰彦	教授
	委 員	石川 恒夫 高橋 利恵 朱 赤	教授 教授 教授			

近代国家としての中国は、中華民国と満州国との関係、日本や欧米との関係が複雑に絡み合っており、建築における近代化を考えることは容易ではない。現代の中国を念頭に、建築近代化の萌芽期を既往研究を通して振り返ると、政治的断絶が生じていたこともあり、中華民国の建築史を研究する際に、東北の満州地方の建築活動を除外したり、逆に、満州地方の近代建築に注目する際に、中国の建築家が推進した建築活動をも視野に置かない事態が生じている。国境ラインが変わり、政治体制が変遷してきたとしても、現代中国にとってみれば、両エリアにおいて一つの時代精神の作用のもとに、諸事象は生まれてきた。しかし、1930年代に建てられた建築の多くは現存していない。そのため、申請論文は建築文化を導入する建築学術組織と情報を伝達する建築雑誌という2つの視点から、最初の中国建築学会である中国营造学社、中国建築師学会と、満州で活動を展開する満州建築協会を選び、それらにより刊行された学会誌や雑誌を資料文献とする。1930年の創刊号から1937年の最終号に掲載された文献のうち469篇の文献を対象に選んだ。同じの時期に活躍した中国人建築家が主導による建築学術組織と日本人建築家が主導による満州建築協会の建築思潮を分析し、中国における近代建築の萌芽期に育まれた建築思潮を多角的に考察することを目的としている。

申請論文は対象文献の内容を把握するために、以下の通りにキーワードの親和性を基づいての分類による統計的考察方法を提案した。まず、対象文献のタイトル、キーセンテンスから対象文献の中心な内容を代表する語句をキーワードに抽出した。キーワードの意味する対象の語義に基づいてグループ化し、その表す内容により、若干のカテゴリーを設定した。このことにより、文献対象とその主旨を類型化した。次に、カテゴリーごとに属するキーワードの指摘頻度を集計して統計的考察を行った。グループの表す内容や範囲により、カテゴリー2を設定した。カテゴリー2の示す学科や分野等の領域により、カテゴリー1を設定し、カテゴリーによって抽出のキーワードの使用頻度を集計した。定量化された内容を基準とし、カテゴリーを手がかりに関連する文章を見つけて内容分析を行った。

申請論文は6章から構成されている。

1章で本研究の背景および動機、また研究対象、考察方法とその有効性を述べた。

2章では、1930年から1937年まで、『中国建築』、『中国营造学社類纂』、『建築月刊』に掲載された330篇の文献を対象とし、建築言説を考察することによって、中国の建築学術組織において、自らの民族様式の起源を探究のため、様式の検討を中心とする建築意匠に関する言説が、建築思潮の主幹となったことを明らかにした。

3章で前章の対象文献を踏まえ、文章や言説の指向性を基にして、抽出したキーワードを欧米と日本に分けた。言説を国別に考察することによって、欧米と日本に関する言説はそれぞれ科学技術の分野と建築文化の分野に焦点を当てていたと明らかになった。主として中国建築学術組織の自国の古代建築の研究の方法論に影響を与えたことが明らかになった。

4章では、1930年から1937年まで、『満州建築協会雑誌』に掲載された139篇の文献を対象とし、建築言説を考察することによって、新興満州国の国家イメージを目指す議論はこの時期の建築思潮の主軸を構成している。また、満州地方を中心とした古建築の考察に基づき、満州建築文化体系の確立に向けた脈絡が形成されたことが明らかになった。

5章で4章の対象文献を踏まえ、文章や言説の指向性を基にして、中国、欧米、日本、とその他の国に分けた。建築言説を国別に考察することにより、明らかになったことは以下の通りである。中国に関する言説が建築と都市の歴史を中心としていた。欧米に関する言説が建築様式を中心としていた。母国の日本に関する言説が熟成した技術と規則を満州への導入を中心としていた。

6章では各章の成果をもって全体の結論を述べた。申請論文は、中国建築家が主導する建築学術組織と日本建築家が主導する満州建築協会が1930年から1937年における中国の建築近代化に与えた影響を明らかにした。このフレームに沿って、現存する事例の考察と比較が、今後の課題として残されている。

上記の概要に示された申請論文の研究内容、および審査員との質疑応答の結果から総合的に評価して、博士学位論文として合格と判断する。